



Title	音訳語から見る『時務報』と『実学報』の関係
Author(s)	陳, 静静
Citation	国語国文研究, 153, 68(27)-56(39)
Issue Date	2019-08-08
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/89722">http://hdl.handle.net/2115/89722</a>
Type	article
File Information	Kokugokokubunkenkyu_153_68(27)-56(39).pdf



[Instructions for use](#)

# 音訳語から見る 『時務報』と『実学報』の関係

陳 静 静

日清戦争後、中国では維新変法を紹介する新聞が多数発行された。1895年から1898年までに、中国で創刊した新聞社は27社に達した（上海図書館1965-84）。それらの新聞には、日本の新聞記事の中国語訳を掲載したものがあり、そのうち比較的正確に出典記録を残しているのは『時務報』と『実学報』である。本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」が最初とされている。当時の中国では、本格的な日本語教育がまだ始まっておらず、日本人漢学者の古城貞吉が『時務報』の翻訳を勤めた。一方、その翌年に刊行された『実学報』は当初二人による「口訳筆述」の形を取っていたが、次第に一人の手によって翻訳されるようになった<sup>1</sup>。

両紙に翻訳された日本の新聞記事は、漢字表記のある外来語より片仮名表記のみのものが多かったので、片仮名で表記された外来語の翻訳に関して考察することは、当時の翻訳状況の一端を明らかにすることができると思われる。そこで、本稿では片仮名单一表記語の翻訳を中心に、両紙における翻訳状況を比較し、それぞれの特徴を明らかにしたい。そして、『時務報』がそれまでの新聞と異なる体裁を取っていたが、後の新聞のモデルになったため、外来語の翻訳においても『実学報』が『時務報』の影響を受けたか検討したい。

## 1 研究背景

両紙に関して、中日同形語の観点から漢語を中心とした研究が行われている。『時務報』に関して、翻訳者古城貞吉の就任経緯を明らかにした沈（2009）、借用語の判定をする朱（2012a、2012b）などがある。『実学報』に関して、ソース記事の掲載紙を『時事新報』『東京日日新聞』『神戸又新日報』など9種類の日本の新聞・雑誌に確定した陳（2017a）、812語の日本漢字語の使用を確認した秦（2010）などがある。

しかし、外来語の翻訳に関する研究は極めて少ない。王（1992a）は「アフリカ」、王（1992b）は「オーストラリア」を中心に、通時的に外国地名の漢字表記を検討した

---

<sup>1</sup> 翻訳者の担当範囲は「東報輯訳」欄：「第2-3冊王宗海口訳王仁俊筆述」「第4-5冊王宗海口訳孫福保筆述」「第6冊-第11冊孫福保訳」、「東報訳補」欄：「第9冊-第14冊程起鵬訳」。

論考である。原則として、外国地名の当て字表記はなるべく原音に近い漢字を使うが、同音異字の場合は、「筆画数の多少」「漢字の持つ意味」という副次的な要因も関係すると指摘している。

## 2 研究資料と研究対象

### 2.1 研究資料

『時務報』は、維新運動時期において最も販売され、影響が大きかった新聞である。1896年8月9日に上海で刊行され、1898年7月26日に光緒帝の「『時務報』を官報にする」という勅諭が下されて終刊になり、計69冊が発行された。本社は「上海福州路福建路口」にあり、初期の「総理」（社長）は汪康年で、「主筆」（編集長）は梁啓超である。体裁は毎冊約20頁、石版印刷、連史紙、「論説」「論折」「京外近事」「域外報訳」などの欄（コラム）を設けた。「域外報訳」欄は全冊の2分の1を占め、主に「英文報訳」「東文報訳」「路透電音」の名で各外国語の中国語訳を掲載した。本格的に日本の新聞記事を訳出し、中国社会に提供したのは『時務報』の「東文報訳」が最初である。日本人の漢学者の古城貞吉がその翻訳を勤め、594本に及ぶ日本の新聞記事を中国語に訳した。

『実学報』はその翌年に創刊され、維新運動時期において最も保守的な人の耳を動かすことができ、さらに革新的な人の心も奪うことができた（「最足以動守旧者之聽、且足以奪維新者之心」）新聞である（湯1993:439）。本社は『時務報』と同じ都市で、「上海英大馬路泥城橋鴻文局間壁」にある。『実学報』の印刷、装丁、用紙、体裁などは全部『時務報』を模倣している。「域外報訳」の部分に「英報輯訳」「東報輯訳」「法報輯訳」などの欄を設けた。読者の希望に応じて、第9冊から「東報訳補」欄を増やし、中国人翻訳者によって日本の新聞記事を中国語に翻訳・掲載している。

### 2.2 研究対象

両紙の関係を検討する上で、次の調査範囲を選定した。『時務報』全記事のうち最も多く翻訳された『東京日日新聞』掲載記事122本（全144本のうち22本未詳）と訳文122本を選び、『実学報』は全ソース記事138本と訳文139本（うち同じソース記事の訳文が2本ある）を調査範囲に含める。

両紙に翻訳された明治30年頃の外来語の分類は、白井（2013）の分類方法に従う。表記形式によって「単記形式」「ルビ形式」「併記形式」に分け、さらに構成要素によって8種類に分けた。

記号	構成要素	語例
単記形式：イ	本行片仮名	「タイムス」
ロ	本行漢字	「亜米利加」
ハ	本行アルファベット	「Lothair」
ルビ形式：ニ	本行漢字+ルビ片仮名	「加 <sup>カ</sup> 奈 <sup>ネ</sup> 陀」

ホ	本行漢字+ルビ平仮名	「 <sup>まっち</sup> 燐寸」
ヘ	本行アルファベット+ルビ片仮名	「 <sup>ジャルシー</sup> jalousie」
併記形式：ト	本行片仮名+本行アルファベット	「ペーン Payne」
チ	本行漢字+本行アルファベット	「 <sup>げんざいてき</sup> 現在の Present」

『時務報』に翻訳された『東京日日新聞』の掲載記事122本を調べると、「イ・ロ・ハ・ニ・ト」の5種類の外来語がある。また、『実学報』のソース記事全138本を調べると、「イ・ロ・ニ」の3種類の外来語がある。頻度の高い形式は「イ・ニ」類である。本稿では「イ」類を「片仮名単一表記語」と称し、これを中心に考察していく。

両紙には音訳が主に施され、意訳、音訳+意訳、意訳+音訳の方法も取られた。それぞれの延べ語数は次のとおりである。語例は、ソース記事の表記、『時務報』か『実学報』音訳語の表記の順に示す。

	『時務報』	『実学報』	語例
音訳	429	233	「アラバマ：阿辣拔麥」
意訳	76	37	「ナポレオン：法人」
音訳+意訳	44	×	「ダイナマイト：得米多炸藥彈」
意訳+音訳	1	×	「ニュー、ゼーランド：新西蘭」

### 3 両紙における共通外来語の翻訳

#### 3.1 両紙とも音訳した語

上記調査範囲のうち、『時務報』と『実学報』において共通に出現した外来語が下記の17語ある。片仮名表記に差異が若干あるものの、同じ語と認定する。なお、語形に差異のある箇所は／で区切って示す。スペースの関係で語例の鉤括弧を省く。

##### 『時務報』訳語

- ①アノトー：亞諾倫
- ②イルクツクス：爾勞活是
- ③オデツサ：阿得斯可伊/俄的都沙
- ④カリホルニヤ：訖里佛兒你亞
- ⑤キユバ：古巴
- ⑥コトリン：哥得林
- ⑦ザバイカル：也米革兒
- ⑧シカゴ：芝嘉高/是家閣
- ⑨タイムス：泰晤士
- ⑩ニコライフスク：尼可賴夫士克
- ⑪ハミルトン：波美兒噸
- ⑫プード：伯得/伯度

##### 『実学報』訳語

- アノトー：矮諾託
- イルクートスク：以路苦託斯苦/司路/司苦<sup>ママ</sup>
- オデツサ：啞笛之殺
- カリフォルニア/ヤ：卡利夫啞路泥矮/耶
- キユバ：氣油派
- コトリン：誇託利痕
- ザハ/バイカル：殺哈以/若拔以卡路
- シカゴ：雪茄閣
- タイムス：他以磨司
- ニコラエ/エフスク：泥誇辣賢夫斯路/司路
- ハミルトン：哈米魯通痕
- プ/フード：普獨/頗督

⑬ブラゴウエスチエンスク：布拉郭威什臣斯克	ブラゴウエスチエンスク：浦拉岳島賢斯氣痕斯苦
⑭フレデリック：布列的律克	フレデリキ：夫立笛利克以/夫立笛以克
⑮ムラウイ/ピエフ/ヴォーフ：摩拉肥合夫	ムラヴィーヨフ：磨辣烏以揺夫
⑯ロイド：路以德	ロイド：洛以獨
⑰ロバノフ/ツフ：魯馬能務	ロバノフ：洛哈諾夫

上記のとおり、両紙において同じ音訳語はない。17組の音訳語を比較しながら、その特徴を見よう。

(一) 訳語全体に当てる字数を見ると、『時務報』が少なく、『実学報』が多い。

例⑥「コトリン」⑨「タイムス」のように、『時務報』で「哥得林」「泰晤士」と3文字の音訳語を当てるのに対して、『実学報』では片仮名に逐一漢字を当て、「誇託利痕」「他以磨司」と4文字の音訳語を当てている。

(二) 両紙とも清音と濁音の区別が曖昧である。

『時務報』では例⑥⑭のように、清音「コト」「フ」に無気音の漢字哥[kə]、得[tə]、布[pu]を当てている。『実学報』では例⑮⑰のように、濁音「ヴ」「バ」にゼロ声母の漢字烏[wu]、軟口蓋摩擦音の哈[xa]を当てている。

(三) 両紙とも長音「ー」を無視する傾向がある。

例①⑫⑮のように、『時務報』と『実学報』がともに長音「ー」に音訳字を当てない傾向がある。例⑤も『実学報』で長音に対応する音訳字がない。

(四) 両紙とも促音「ツ」に漢字を当てて音訳した。

例③「オデツサ」はオデッサ(Odessa)の古い表記であり、ウクライナの黒海に面する港湾都市の名前である。両紙では促音表記にそれぞれ漢字「都」「之」を当て、「ツ」の音と合わせている。

(五) 基本的に「1片仮名対1漢字」の対応であるが、両紙とも例外がある。

例⑤「キユバ：古巴」⑩「ニコライフスク：尼可頼夫士克」のように、『時務報』では片仮名と漢字を「2対1」の関係で対応しているのに対し、例⑭「フレデリキ：夫立笛利克以」のように、『実学報』では「1対2」の関係で対応する例もある。

(六) 両紙とも片仮名の音からかけ離れた漢字がある。

『実学報』では例①「アノトー：矮諾託」の「ア：矮」、例⑬「ブラゴウエスチエンスク：浦拉岳島賢斯氣痕斯苦」の「ゴ：岳」「エ：賢」のように、漢字の中国語発音が片仮名からかけ離れている。一方、『時務報』では例③「オデツサ：阿得斯可伊」は「サ：斯」がともに清音[s]で始まるため対応しうが、「可伊」は何か見当がつかない。

(七) 『時務報』には現代中国語に残る音訳語が2語あり、『実学報』にはない。

例⑤「キユバ」⑥「タイムス」は『時務報』で「古巴」「泰晤士」と音訳され、しかも現代中国語に残っている。一方、『実学報』の音訳語「氣油派」「他以磨司」は現代には残らない。

### 3.2 片方が音訳した語

『時務報』と『実学報』において一方が音訳した外来語が下記の4語ある。

### 『時務報』

- ⑮アレキサンドル：亞力山大、亞歷山德
- ⑯ビスマーク：俾斯麥
- ⑰ルーブル：留布兒、留
- ⑱ナポレオン：拿破崙

### 『実学報』

- アレキサンダー：なし
- ビスマルク：なし
- ルーブル：兩
- ナポレオン：法人

4組の音訳語は『時務報』で音訳され、しかも現代中国語に繋がっている。例⑮⑱⑲の音訳語「亞力山大、俾斯麥、拿破崙」は現代中国語と同じ表記である。なお、例⑲「ルーブル」の音訳語として、調査範囲では現代中国語と同じ音訳語「盧布」が見当たらないが、『大阪朝日新聞』掲載記事の訳文に音訳語「盧布」がある<sup>2</sup>。『宛字外来語辞典』（1979）で確認した結果、「亞歷山大、亞歷山德、留、拿破崙」が収録され、外来語の漢字表記として日本語で使用されていた。外来語を翻訳した際、古城氏がこれらの宛字表記を音訳語にしたことが分かる。一方、『実学報』では「ルーブル」を中国の貨幣単位「兩」、前後の文脈によって「ナポレオン」を「法人」と意識している。

## 4 両紙における片仮名と漢字の対応

両紙における片仮名と漢字の対応関係をまとめると、付録1、2のとおりである。例を挙げながら両紙における片仮名と漢字の対応の特徴を見てみよう。

### 4.1 両紙における片仮名と漢字の字数対応関係

まず、両紙において片仮名1文字に対して複数の漢字を対応させたことがあることが確認できた。付録1の『時務報』では「ル：路、兒、爾、而、律、羅、樂、雷、力、了、留、郎」のように、最多12字の漢字と対応している。付録2の『実学報』では「サ：殺、煞、沙、薩」「ポ：薄、巴、樸、普」と最多4字の漢字と対応している。

一方、語単位では、片仮名と漢字の対応が「1対1」だけでなく、『時務報』では「2対1」乃至「3対1」の場合も多く見られる。例えば、

- アイ：愛 — 「アイワゾウスキー：愛華茶斯奚」
- ウイ：威 — 「デ、ウイツテ：的威都的」
- ヴァ：華 — 「カネヴァアロ：卡里華羅」
- バイ：米 — 「ザバイカル：也米革爾」
- ヒユ：守 — 「ヒユアンチャカ：守安茶加」
- フォン：豊 — 「アルフオンソ：亞兒豊梭」

<sup>2</sup> 「俄國頃欲增添水師。議定費用九千萬盧布。諾暴斯地報論云。」(『時務報』第66冊「俄國蓄志於印度洋」)

それに対して、『実学報』には片仮名に逐一漢字を当てる原則があり、つまり「1対1」が主な表音方法であるが、発音に近い漢字がない場合、「1対2」で音を表すものが2例ある。例えば：

「フレデリキ：夫利笛利克以」 「スギ：司緝以」

#### 4.2 両紙における片仮名の音に合わない漢字

『時務報』において中国語の発音で読むと、片仮名の発音に合わない漢字の例を多数挙げられる。ただし、それらの漢字を日本語で音読みすると通じる。呉音読み「都、奈、具」、漢音読み「加、齊（齊）、馬」、及び漢音と呉音が同じ「我、波、本」がその例である。日本人翻訳者の母語干渉と考えられる。例えば、

カ：加 — 「カザン：加竄」  
 ガ：我 — 「ナイガー：那爾我」  
 グ：具 — 「グロスバナア：具魯士比那斯」  
 サイ：齊 — 「サイプラス：齊布羅是」  
 ツ：都 — 「オホーツク：俄喝都克」  
 ナ：奈 — 「エレナ：埃列奈」  
 ハ：波 — 「リトハ：里得波」  
 ボン：本 — 「ボンツー：本都」  
 バ：馬 — 「ロバノフ：魯馬能務」

『実学報』にも現代中国の標準語で発音するとやや不自然な漢字が多数見られた。翻訳者が福建省（王宗海）、江蘇省（王仁俊、孫福保、程起鵬）の出身で、方言による訛りのためであると考えられる。例えば、

ア：矮 — 「アランカ：矮鐵痕カ」  
 エ：賢 — 「ウエツクス：烏賢之苦司」  
 オ：唾 — 「オリガ：啞利額」

#### 4.3 両紙における片仮名と漢字の安定した対応

付録1、2の片仮名に当てられた複数の漢字の中に、両紙とも比較的安定した対応が多くある。「ア」を含む語を例に、『時務報』は「ア：亜」、『実学報』は「ア：矮」の対応関係が安定している。

『時務報』	語数（延べ・異なり）	語例
ア：亜	— (30語・13語)	「アール：亞歩路」
ア：阿	— (2語・1語)	「アムール：阿穆爾」
ア：哀	— (1語・1語)	「アラスカ：哀拉斯格埃」

ア：奥	— (1語・1語)	「 <u>アル</u> サス・ローレン： <u>奥</u> 而賽斯鹿林」
ア：和	— (1語・1語)	「サンステフ <u>ア</u> ノ：倉 <u>吾</u> 士の福 <u>和</u> 奴」
『実学報』	語数	語例
ア：矮	— (26語・15語)	「ウ <u>ア</u> ツツ：鳥 <u>矮</u> 之之」
ア：阿	— (4語・4語)	「フ <u>ア</u> ウル：傅 <u>阿</u> 和魯」
ア：啞	— (1語・1語)	「ミケロ・ <u>ア</u> ンゼリン・ゴリ： <u>啞</u> 希苦洛」

#### 4.4 両紙における撥音、長音、促音の音訳

##### (1) 撥音「ン」の音訳

付録1『時務報』では「ン：吾、唔、五」の対応がまとめられたが、「吾」は4例、「唔」は3例、「五」は1例あるのみである。多くの場合、「ン」は前接仮名と組合せて発音するため、音訳する際にも多くの場合 [n] [ŋ] の音を持つ漢字1文字で訳した。例えば、

オン：恩	— 「 <u>オン</u> ス：恩 <u>斯</u> 」
タン：旦	— 「 <u>スタン</u> ダート：斯 <u>旦</u> 達得報」
フオン：豊	— 「 <u>アルフオン</u> ソ：亞兒 <u>豊</u> 梭」
ラン：蘭	— 「 <u>アラン</u> イエス：亞 <u>蘭</u> 耶 <u>斯</u> 」
レン：連	— 「 <u>アレ</u> ン：亞 <u>連</u> 」
ロン：郎	— 「 <u>クロン</u> ダイク：克 <u>郎</u> 大哀克」

付録2『実学報』では「ン：痕、啞、愛」とも訳しているが、「啞」は2例、「愛」は1例のみあり、「痕」は82例ある。「ン」と「痕」の対応関係が圧倒的に多く、安定している。

『実学報』の音訳の方法について時間的に見れば、「ン：啞」の対応は、王宗海と孫福保の共同作業による翻訳初期の訳語である。程起鵬は「東報訳補」欄で最初は一度だけ「ン」に「愛」を当てたが、以後「ン」を訳す時「痕」に統一した。

「シチー・ <u>オフ</u> ・ベキン： <u>西</u> 幾握夫攀 <u>啞</u> 」	(第4冊 王宗海／孫福保)
「 <u>プレ</u> ストン：夫來思獨 <u>啞</u> 」	(第4冊 王宗海／孫福保)
「 <u>エルフ</u> ヒンストン：愛路府希 <u>愛</u> 司托 <u>愛</u> 」	(第9冊 程起鵬)
「 <u>プレ</u> ストン：普立司托 <u>痕</u> 」	(第11冊 程起鵬)

要するに、両紙において、『時務報』では「レン：連」のように「2対1」の方法を多用しているのに対して、『実学報』では「ン：痕」を多用している。

一方、『時務報』の「ン：吾、唔、五」の対応と『実学報』の「ン：痕、啞、愛」の対応とは字形から無関係のようであるが、『漢語方言発音字典』で確認した結果、上海方言では(吾 [ŋu]、唔 [nh]、五 [ŋ]) いずれも鼻音性を帯びている。『実学報』のほうは翻訳者の母語干渉と考えられるが、『時務報』は古城氏の「ン：吾、唔、五」の使



用において、母語干渉というより、中国人翻訳者と同じく上海あたりの方言の影響を受けたと推測される。

## (2) 長音「ー」の音訳

付録 1、2 では長音「ー」を挙げておらず、前節でまとめたように、共通外来語 17 語の翻訳において、両紙とも長音「ー」を無視する傾向があるが、片仮名と漢字の対応を全般的に考察すると、『時務報』では長音「ー」に漢字を当てる音訳語も数例見づかり、『実学報』では見つからなかった。イ段の長音に「以、爾」、ウ段の長音に「務」、エ段の長音に「埃」と発音の近い音訳字が当てられている。

「キープル：奇爾勃爾」	「シール：是爾兒」
「ピーク・ヒル：比以克」	「クー：克務」
「ブーチニ：伯務地尼」	「ディリー・メール：的利米埃兒」

## (3) 促音「ツ」の音訳

前節でまとめた共通外来語 17 語の翻訳において、両紙とも促音「ツ」に漢字を当てているが、『時務報』では「オデツサ：俄的都沙」のほか、多くの場合音訳字が当てられていない。一方、『実学報』は多くの場合「ツ：之」の対応に則って漢字を当てている。

### 『時務報』訳語

「オデツサ：阿的士」	「カルカツタ：加爾各搭」
「ブリヤツト：莫利耶德」	「ポールチツク：巴爾結克」
「マツキンレー：麥見尼」	「ラツトマル、ハウプト：拉得麥兒好布土」

### 『実学報』訳語

「ウエツクス：烏賢之苦司」	「オデツサ：啞笛之殺」
「カムサツカ：磨殺之卡」	「デツカン：笛之卡痕」
「フイリツピン：夫以利之皮」	「マリポツト：麥利薄之託」
「ゲーリツク：穉力致果閣/主顧閣」	「ドーリツク：獨里此古攔」

## 5 両紙訳語と用字異同の原因

### 5.1 既存語と新語の利用

『時務報』の訳語はできるだけ既存の訳語を使用し、『実学報』は新語を積極的に使用する傾向がある。この点について秦 (2008)、陳 (2016、2017b) が詳しく論じている。『実学報』の翻訳者の中にも、注釈を付けるなどをして慎重に新語を取り扱う者もいたが、下記の例のように、おおむね新語を積極的に使用する傾向がある。

『時務報』 訳語

「加奈陀/加奈多：加拿大」  
「独逸：德國」  
「会社：公司」  
「大統領：總統」

『実学报』 訳語

「加奈陀/加拿陀：加奈陀/加拿陀」  
「独逸：德國/德意志國」  
「会社：會社/公司」  
「大統領：大統領」

5.2 両紙における母語干渉

『時務報』は、翻訳者が日本人であるため、日本語の影響で「ナ：奈」「サイ：斉」など日本の音読み規則に従っていた。一方、『実学报』は、教科書『東語入門』（1895）の発音説明、特に「いろは歌」の片仮名と漢字の対応と高い類似性を持ち、「キ：克」のような「反切」の注音形式も受け継いだと推測される。詳しくは別稿で論じる。

イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ	ル	ヲ	
以	洛	哈	泥	化	海	託	氣	利	奴	路	唾	
ワ	カ	ヨ	タ	レ	ソ	ツ	ネ	ナ	ラ	ム	ウ	
滑	カ	揺	他	立	沙	之	内	那	辣	磨	烏	
キ	ノ	オ	ク	ヤ	マ	ケ	フ	コ	エ	テ	ア	
伊	諾	唾	苦	耶	麦	開	夫	誇	賢	鉄	矮	
サ	キ	ユ	メ	ミ	シ	エ	ヒ	モ	セ	ス	ン	
殺	克	以	油	美	米	希	賢	希	木	息	司	痕

また、『東語入門』の凡例「所注字音系就江浙口音、易於通用」（注の字音は江蘇・浙江辺りの発音を帯び、通用しやすいのである）から、音訳に選ばれた漢字が個人の訛りと言うより、その地域の通用性から考えた結果であろう。したがって、『実学报』の翻訳者たちにも、刊行地の上海周辺在住の読者たちにも通用したと考えられる。

5.3 「中西文合璧表」との関係

英語の固有名詞の訳語を統一するために、『時務報』は第14冊から第46冊まで「中西文合璧表」を設け、計1037語の英語とその中国語訳を載せた。古城氏の音訳語がそれらの訳語と同じものが8例ある。したがって、古城氏は「中西文合璧表」の英語訳語を参照したと考えられる。

『時務報』 東報訳語

「クロンダイク：克郎大哀克」  
「クリート：革雷得」  
「ダンダス：滕臺斯」  
「マッキンレー：麥荊來」  
「マンロー：孟綠」  
「莫斯科：莫斯科」

「中西文合璧表」 訳語

Klondyke 克郎大哀克  
Crete 革雷得  
Dundas 滕臺斯  
Mackinley 麥荊來  
Munro 孟綠  
Moscow 莫斯科

「ムラヴィーヨフ：摩拉肥合夫」	Mouravieff 摩拉肥合夫
「 <sup>ユーラル</sup> 烏拉爾山：烏拉山」	Ural 烏拉山

一方、『実学報』も同じ構成である。「中西合璧表」という名で、「英報輯訳」欄の後ろに置かれる。第3、7、10、13冊に現れ、計227語の英語と中国語訳がまとめられている。ただし、日本語の音訳語は「中西合璧表」との関係が薄く、別々に工夫を凝らしたようである。

『実学報』東報訳語	「中西合璧表」訳語
「ウイリアム：烏以利矮」	William 威廉
「キューバ：氣油派」	Cuba 古巴
「シカゴ：雪茄閣」	Chicago 雪加哥
「セイロン：息以洛痕」	Ceylon 錫蘭

## 6 まとめ

『時務報』『実学報』における音訳語を考察した結果をまとめると次のとおりである。

まず、両紙における共通外来語21組の翻訳状況を比較し、両紙に同じ音訳語が見つからないが、同じ音訳方法を使用する傾向が見られた。しかし、音訳語全般へと範囲を広げ、両紙における片仮名と漢字の対応をまとめ、音訳漢字の使用傾向や、長音、撥音などの翻訳方法にも異なる傾向が見られた。ともに中国語方言訛りの音訳字が見られるにも関わらず、両紙音訳語にはそれぞれの母語干渉がある。そして、『時務報』は中国既存語を尊重しつつ、同紙中国人による英報訳語を参照したのに対して、『実学報』は同紙の英報訳語を参照せず、『東語入門』などを参照して機械的に音訳語を施した特徴が見られた。それらをもって、両紙には音訳語の面では参照関係がないと推定される。

## 参考文献

- 宛字外来語辞典編集委員会（1979）『宛字外来語辞典』柏書房
- 王 敏東（1992a）「外国地名の漢字表記について—『アフリカ』を中心に」『語文』58号
- 王 敏東（1992b）「外国地名の漢字表記をめぐって—『オーストラリア』を中心に」『待兼山論叢（文学）』26号
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編（1968）『輯訳日本訳語』京都大学国文学会
- 上海図書館編（1965-84）『中国近代期刊編目彙録』上海人民出版社
- 朱 京偉（2012a）「『時務報』（1896-1898）中的日語借詞—文本分析与二字詞部分」『日語学習与研究』2012（3）
- 朱 京偉（2012b）「『時務報』（1896-1898）中的日語借詞—三字詞与四字詞部分」『日

本学研究』22号

- 白井久美子 (2013) 「大正期『婦人公論』における外来語表記の変遷」『人間文化創成科学論叢』15
- 沈 国威 (2009) 「『時務報』の東文報訳と古城貞吉 (東アジア文化交流—人物往来)」『アジア文化交流研究』4
- 秦 春芳 (2008) 「中国近代新聞と日本新漢字語の導入—日本語記事「清国膠州湾」の中訳を例として—」『或問』第15号 白帝社
- 秦 春芳 (2010) 「近代中国語における日本漢字語借用に関する研究—定期刊行物の翻訳記事を中心に—」広島大学博士論文
- 陳 静静 (2016) 「公定尺度の単位「キロ」について」北海道大学文学研究科『研究論集』16号
- 陳 静静 (2017a) 「近代日本新聞の中国への導入について—『実学報』『東報輯訳』『東報訳補』欄の場合—」北海道大学文学研究科『研究論集』17号
- 陳 静静 (2017b) 「『実学報』における日本の新聞記事の翻訳について—『中外商業新報』掲載「廣東金礦の發見」を例に—」『或問』32号 白帝社
- 湯 志鈞 (1993) 『戊戌時期的学会和報刊』台湾商務印書館  
『漢語方言發音字典』<http://cn.voicedic.com/>

付記 本論文は天津外国語大学2019年度科研プロジェクト「『時務報』『実学報』音訳語比較研究」の研究成果の一部である。

(ちん せいせい・天津外国語大学講師)

付録1：『時務報』における片仮名と漢字の対応

仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字
ア	阿、亞、哀、奧、和、兒	イ	也、以、一、哀、爾、	ウ	烏、務	エ	也、合、埃、爾	オ	俄、阿、爾
カ	卡、加、喀、各、訖、家、革、格、蓋	キ	奚、基、奇、啟、奎	ク	苦、克、括、恢、肯	ケ	給	コ	哥、可、古、高
サ	沙、撒、賽、莎、差、薩、殺、三、士	シ	西、悉、昔、斯、獅、是、士、什、芝、申、朱	ス	斯、是、士、氏、希、司、思	セ	些、西、哈	ソ	梭、沙
タ	打、搭、大、帖、達	チ	的、之、地、希、丁、結、久	ツ	都、子	テ	的、得、等	ト	德、得、偷、盜、拖、當、他、達、脫、都、土
ナ	那、拿、納、奈	ニ	尼、爾、你、宜、利	ヌ	なし	ネ	呢、尼、了、里、納、利、亞、提	ノ	諾、那、奴、能
ハ	哈、赫、波、洽	ヒ	比、非、穢、系、蘇	フ	夫、福、甫、浮、弗、務、布、和、非	ヘ	很、黑、耶、溫	ホ	喝、啡、呵、可、荷、貨、波
マ	麥、馬、莫、默	ミ	米、美、密、未	ム	晤、唔、穆、摩、母、木、門、米	メ	米、美、密、麥、眉、木、敏	モ	莫、茅、摩、麻、膜
ヤ	亞、耶、也			ユ	西、裕			ヨ	約、阿
ラ	拉、刺、鄰、兒、羅、那、拿	リ	利、立、里、理、雷、律、爾、耶、米	ル	路、兒、爾、而、樂、雷、了、留、郎	レ	列、力、歷、雷、拉、利、里、來、爾、尼	ロ	羅、魯、鹿、路、爾、拉、恪
ワ	華、亞、倭、維	キ	なし			エ	賢、埃	ヲ	なし
ン	吾、唔、五								
ガ	卡、加、噶、我、格、喀、瓦、聒	ギ	義、奚、古	ゲ	具、古、克、我、爾、虞	ゲ	卡	ゴ	哥、古、閣、郭
ザ	沙、也、耶	ジ	士、尼、爾、衣、埏、都	ズ	子、斯、士、瑞	ゼ	色、車、斯、梭、謝、捷、耶	ゾ	茶
ダ	達、打、得、那、拿	チ	直、士	ヅ	自	デア	的、地、得、爾	ド	得、德、多、大、東、度、都、達、竇
バ	巴、把、馬、伯、白、罰、米、勃、具、他	ビ	比、卑、俾、彼、布	ブ	不、布、伯、勃、薄、夫、母、莫、木、ト、維	ベ	比、勃、伯、彼、委	ボ	伯、罷、摩、波、莫、木
パ	巴、帕、喀	ピ	卑、肥、比、拍	プ	布、伯、甫、普、毛、爾	ペ	巴、披、皮、拍	ポ	木、破、巴、群

付録 2：『実学報』における片仮名と漢字の対応

仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字	仮名	漢字
ア	矮、阿、啞	イ	以、已、衣	ウ	烏	エ	賢	オ	啞、和、夏
カ	カ	キ	克、以、氣、 克	ク	苦、可	ケ	開	コ	誇、古
サ	殺、煞、薩、 沙	シ	希、之、西	ス	司、斯	セ	息	ソ	沙
タ	他、太	チ	氣、幾	ツ	之、此	テ	鐵	ト	託、托、篤
ナ	那	ニ	泥、尼	ヌ	奴	ネ	内	ノ	諾
ハ	哈	ヒ	希	フ	夫、府、富	ヘ	里	ホ	化、保
マ	麥	ミ	米	ム	磨、木	メ	なし	モ	木、莫、謨
ヤ	耶			ユ	油			ヨ	搖
ラ	辣、拉、癩	リ	利、立、里	ル	路、魯、羅	レ	立、來、蘭	ロ	洛、羅
ワ	滑、懷	キ	伊、以、意			エ	賢、愛	ヲ	辣（ママ）
ン	痕、愛、啞								
ガ	額	ギ	緡以	グ	餓	ゲ	緡、開	ゴ	岳
ザ	殺、若	ジ	其	ズ	司	ゼ	席、息	ゾ	孰
ダ	達	ヂ	其	ヅ	治	デ	笛	ド	獨、道、督
バ	拔、派	ビ	希	ブ	浦、簿	ベ	培	ボ	撲、簿
パ	拍、派	ピ	皮、普	プ	普	ペ	配、攀	ポ	薄、巴、樸、 普